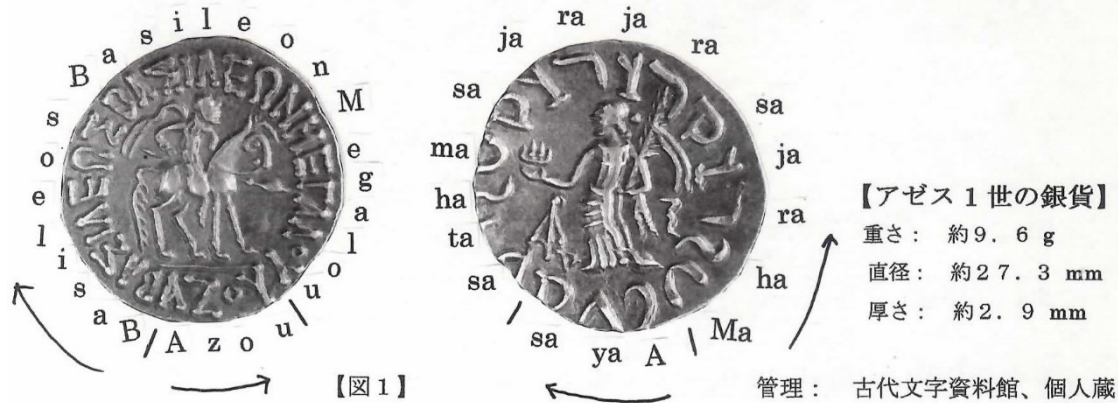


## アゼス1世の銀貨とシャカ族の王の貨幣

2001251017 寺澤 知美



### 1. アゼス1世の銀貨について

【図1】は、シャカ族の王アゼス1世(B.C.57~)の銀貨である。表には“長槍を持つ王の騎馬像”、そして裏には“左手に炎、右手に紐の縛り付けられたヤシの枝を持つ女神像”が表わされている。この“長槍を持つ王の騎馬像”の図柄は、遊牧民的な特徴を表わしていると考えられ、シャカ族の貨幣に特徴的なものとなっている。

次に、この貨幣の銘文についてであるが、表にはギリシア語・ギリシア文字で“Basileos Basileon Megalou Azou”(王中の王にして偉大なるアゼスの)、そして裏にはそのプラークリット語訳“Maharajasa rajarajasa mahatasa Ayasa”がカローシュティー文字によって刻まれている。P.L.グプタ(2001)によれば、このような2言語表記の様式は、インド・バクトリア系の王たちが、バクトリア領ではなく、インド領において発行した貨幣によく見られるようである。

### 2. アゼス1世と他のシャカ族の王の貨幣(銘文)との比較

【表1】からわかるように、シャカ族の王であるマウエス、アゼス1世、アジリセスの3種類の貨幣(それぞれ、マウエス【図2】、アゼス1世【図1】、アジリセス【図3】)は、ギリシア語・ギリシア文字によって、王の名前の部分を除き全く同じ銘文が刻まれている。すなわち、“Basileos Basileon Megalou”(王中の王にして偉大なる)である。それに対して、【表2】のプラークリット語・カローシュティー文字においては、それぞれの表記に多少異なる点があることがわかる。まず大きく異なっている点は、マウエスの貨幣に“Maharajasa”(大王)が刻まれていない点である。

P.L.グプタ(2001)に、インド・バクトリア系の王の貨幣のギリシア文字について、次のような記述がある。「これらの貨幣のギリシア文字は、いずれも次の3語を伴っている。(i)王を意味する Basileos。(ii) 次のタイトルのうちの1つ—Soterou(救済者の)、Megalou(偉大な)、Aniketou(無敵の)、Nikephorou(勝利をもたらす)、Philopaterou(父を敬う)、Epiphanou(顕現の)、Dikaiou(正義の)。(iii) それを発行した王の名。2言語の貨幣では同じ語がプラークリット語訳され用いられた。」

マウエスの用いたギリシア語の銘文は全部で4語であり、インド・バクトリア系の王たちの用いた3語のものに比べて、1語、すなわち“Basileon”(王中の)が多くなって



<マウエス>

【図2】前田 (1992) より



<アジリセス>

【図3】P.L.グプタ (2001) より

【表1】 3つの貨幣のギリシア語・ギリシア文字による銘文

王	ギリシア語・ギリシア文字
マウエス (図2)	Basileos Basileon Megalou Mauou
アゼス1世 (図1)	Basileos Basileon Megalou Azou
アジリセス (図3)	Basileos Basileon Megalou Azilidou

【表2】 3つの貨幣のプラークリット語・カローシュティエー文字による銘文

王	プラークリット語・カローシュティエー文字
マウエス (図2)	Rajadirajasa mahatasa Moasa
アゼス1世 (図1)	Maharajasa rajarajasa mahatasa Ayasa
アジリセス (図3)	Maharajasa rajatirajasa mahatasa Ayilishasa

いる。しかし、それに対応するプラークリット語訳は、“Rajadirajasa mahatasa Moasa”の3語のままである。“Maharajasa”という語は、インド・バクトリア系の王たちも、ギリシア語の“Basileos” (王)にあたる語として一般的に用いていたものであり、またマウエス自身も別の貨幣で用いているものである。とすると、この貨幣に“Maharajasa”の語が刻まれなかったのは、単にプラークリット語訳の際に生じた問題であったのだろうか。アゼス1世は、マウエスの銘文に“Maharajasa”を加えた。そうすることによって、過剰表現気味のギリシア語表記との釣り合いがとれるようにしたのであるだろうか。それとも何かもっと別の意味、例えば政治的な意味合いが隠されているのであろうか。

最後に、この3種類の貨幣の相違点をもうひとつ挙げておきたい。【表2】からわかるように、ギリシア語の“Basileon”にあたるプラークリット語訳が、一番時代の古いマウエスでは“rajadirajasa”、次のアゼス1世では“rajarajasa”、そして3番目のアジリセスでは“rajatirajasa”と表記されている点である。ギリシア語・ギリシア文字には見られないこのような表記の違いは、大変興味深い現象であると言えるであろう。

<参考文献>

- ・ 河野六郎、千野栄一、西田龍雄編 2001 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂
- ・ ジョージ・ウッドコック 金倉圓照他訳 1972 『古代インドとギリシア文化』平楽寺書店
- ・ P.L.グプタ 山崎元一他訳 2001 『人間科学叢書33 インド貨幣史—古代から現代まで—』刀水書房
- ・ 前田耕作 1992 『バクトリア王国の興亡』第三文明社
- ・ 山崎元一 1997 『世界の歴史3 古代インドの文明と社会』中央公論社